

動詞活用の変遷

— 二段活用の一段化を中心に

佐々木 淳志

二段活用の一段化に関しては多くの研究があるが、それらの多くは個別事象の状況観察に留まり、一段化を起こす要素間の考察が不十分である現状がある。そのため、二段活用の一段化の理由についての回答を得にくい。そこで、本稿では、近松世話物を軸に、上方の話し言葉性の高い作品（遊女評判記、歌舞伎台帳、咄本、洒落本）を資料として扱うことで二段活用の一段化の様相を明らかにした。

調査・考察の結果、「機能・本質的」観点から一段化を進める要素として「本来の機能の喪失」「語の安定化」があること、二段維持の要素として「本来の機能維持」があること、一段化と二段活用維持を並存利用する要素として「格関係の決定に関わる要素」があることがわかった。また、「表出・副次的」観点の要素として「装飾意識」「標準と非標準（規範意識）」があることがわかった。

その結果、二段活用の一段化は「表現形式の効率化」として国語史上に位置づけられる変化であることが明らかになった。